

Antaŭ unu jarcento

La granda milito kaj Esperanto

redaktita de Javier Alcalde kaj José Salguero
eldonita de SAT (Eldona Fako Kooperativa), 2018
375 paĝoj

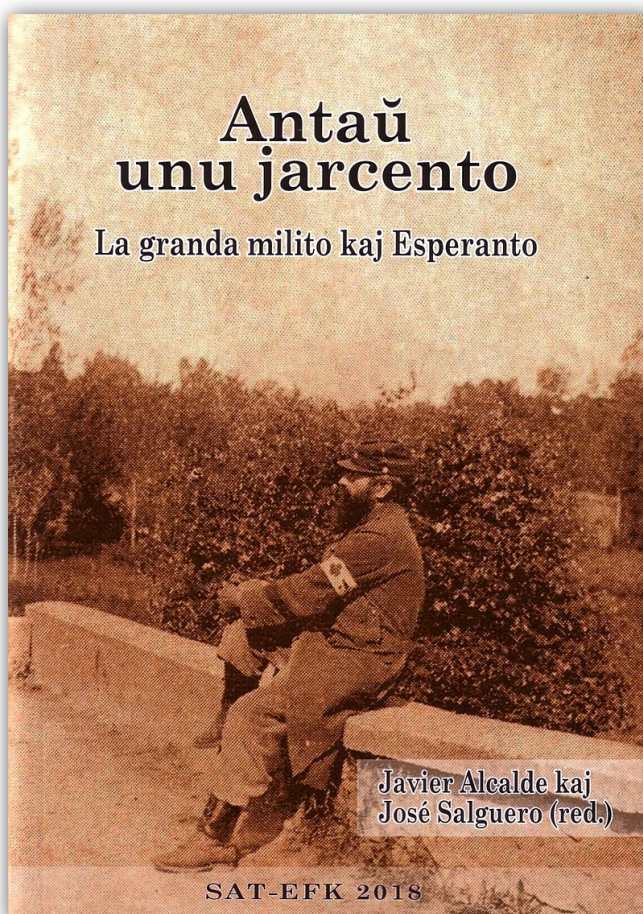
本書のサブタイトルにあるLa granda milito (大戦争)は、英仏を中心とした第一次世界大戦の別称であるが、その呼び方自体、日本ではまだなじみが少ない。しかし、その名のとおり、大戦は当時の人々に大きな衝撃を与え、ドイツ、ロシア、ハプスブルク、オスマンの各帝国は解体し、ロシアでは革命の結果、社会主義政権が成立した。大戦はまたエスペラント運動にも大きな影響を与えた。終戦から百年が経過した今、両者の関わりを多面的に検証しようとした労作が本書である。

本書の第一部「戦争」では、本書全体に関わる総括的な論文、大戦をめぐる記事、論文が、第二部「戦争とエスペラント」では、大戦とエスペラントとの関わりをめぐる文書が、第三部「個人的回想」では、6名のエスペランチストが語るパーソナル・ヒストリーがそれぞれ収録されている。

本書は、一人又は数人の研究者による見通しの利いた歴史記述ではなく、同時代人の書き残した記録や回想、現代の研究者による論文等々、1ページの記事から120ページ近い長大な手記まで、性質も量も異なるテキストを収録している。編者は本書の性格をモザイクと形容しているが、予め全体のデザイン、特定の観点からの評価があつて、それに合うように個々のテキストをはめ込んだわけではない。むしろ、大戦とエスペラントとの関わりという巨大なテーマについて、可能な限り多面的な角度から照射しようとしているように思われる。

本書では、ザメンホフ、ランティ、ソロス、バギーという著名なエスペランチストたちがどのように大戦に対処したかも紹介している。パリで開催予定だった第10回世界エスペラント大会は、1914年8月2日、大戦の勃発により急遽中止となり、大会に参加しようとしていたエスペランチストたちは大混乱に陥った。ザメンホフもまた深い失意を抱いてワルシャワに戻り、1917年4月14日に、翌年11月11日の終戦を待つことなく死去した。本書はプリヴァの有名な伝記(“Vivo de Zamenhof”)から晩年のザメンホフの生活と思想を論じたくだりを、そして、民族差別の撤廃を力説する「外交官への呼びかけ」を収録していて、今も新鮮である。

ランティは、大戦中は北フランスで野戦病院の衛生兵を務めた(本書の表紙に当時の彼の写真



が掲載されている)。本書には、大戦中の日記(未公表)の一部が収録され、ナショナリズムが吹き荒れるなかでの彼の反骨ぶりをうかがうことができる。彼は1921年、SATを創立し、やがてソ連社会主義の鋭い批判者になるが、そうした姿勢の萌芽がすでに感じられる。

ソロスとバギーは、シベリアで長らく捕虜として過ごした。本書では、捕虜収容所からの脱走をテーマとするソロスの小説『現代のロビンソン』(“Modernaj Robinzonoj”)を中心に、トンキンが両者の文学のあり方を論じている。彼らは戦後、Literatura Mondo を創刊し、エスペラント文学の新たな地平を切り開くことになる。

その他、エスペラントによる戦争プロパガンダ、捕虜の処遇、UEAを通じての献身的な捕虜救援活動などに関する記録もある。また、ドイツ、フランス、イギリスなどの捕虜収容所で盛んだったエスペラントの講習の実態に関する詳細な報告もある。アジアについては、日本・中国・韓国の共同研究に基づく歴史記述(“Historio por malfermi estontecon”)の一部が収録されていて、日本が東アジアにおけるドイツの権益を奪取しようと参戦し、それに反発して5・4運動や3・1独立運動が勃発する経緯が述べられている。

本書は容易に読み尽くせる本ではない。ただ、そもそも同時代人にとって戦争の帰趨は見当もつかず、現実混沌そのものだった。そうした彼らの戦争体験に思いを馳せながら本書を読むと、さまざまな想像をかき立てられる。特に第三部の回想では、庶民たちが20世紀の激動の時代をどう生きたかを語っていて興味が尽きない(ブロンシュテインも登場し、知人について語っている)。

編者のJavier Alcaldeは、1978年、バルセロナ生まれの若手の政治学者であり、2018年に行われた第103回世界エスペラント大会(リスボン)の大会テーマの決定に関わった。彼の論文「平和への努力ーエスペラントの実践的国際主義」は、フェミニズム、キリスト教的エキュメニズム、兵役拒否などの運動とエスペラントとの密接な関わりを論じて深い感銘を与える。彼は論文の結びで、大戦はエスペラントの理念に大きな打撃を与えたが、その後の戦間期には、国際連盟やプロレタリア運動などで新たな隆盛をもたらしたと指摘している。それについて論じることは彼の言うとおりの別物語であるが、その後の展開を思い浮かべつつ本書を読めば一層興味が増すだろうと思う。

(本書は、La Movado 2018年11月号に収録されたものであり、転載にあたって一部加筆修正した。)